

被災地の農業再生にどう関わられるか

講義と資料を通して、被災地の農業再生という課題を学生に自分のことのように考えてほしいという思いを感じた。確かに、現場に足を運んでみないと、一般に問題にされる農地とは違った性質を持つ山間部の農地にはなかなか注目できないだろうと思うし、また自分でもそういったところに注目できるようになりたいと思った。被災地の農業再生と言っても、本当にいろいろなことができるのだろう。除染活動の作業を手伝う、新しく始める農業のデザインをする、協力してくれる人を集める、技術の面で協力する、実験の作業を手伝う、他の活動と折り合いをつけるなど、講義や資料を通して自分が気が付いただけでもこれだけある。

長い目で見て、自分が被災地の農業再生に関わるならば、新しい農業がどんなものになるか考えてみたいと思った。まだ自分の専門分野を持っていないので、具体的にどんなことをしたいかはぱっと答えられないが、新しい農業を考えるにあたって、大きく見て、こだわるべきポイントはいくつかあると思う。

まず、被災地のために行うということ。当たり前であるが、手段の目的化は気を付けないとすぐ起こってしまうと思う。また、この視点は、他のさまざまな活動と折り合いをつけていくためにも大事だと思う。

次に、最先端を行こうとすること。最先端と言っても技術面であったり、農業についての捉え方であったり、農業に関するさまざまな分野で最新の知見まで考慮することである。こうした取り組みは結果的に被災地の外でも重要な意味を持つと思う。そこに关わる形としては、研究者として自分の専門を活かすであるとか、さまざまな分野の研究者をつなぐなどの形が考えられる。今回資料で、研究者のネットワークが大事という話があったと思うが、それは本当だと思う。

三つ目に、農業の多面的な機能を見落とさないこと。農業にはただ作物を生産するだけではなくて、村の人々の生活そのものであったり、村自慢の美しい景観を作り出すものであったり、伝統と密接に結び付いたものであったり、避難している人々を村に呼び戻すものであったり、いろいろなレベルでさまざまな意味を持つものだと思う。ある分野で最先端を行こうとしても、そういったさまざまな機能は無視されてはならないと思う。

農業はその地域の伝統に密接に関わるものだと思うが、震災後、私は伝統の持つ意味の大きさを感じる事が何度かあった。テレビで見た映像なのだが、津波で町が流れ、何も無い暗闇をあかりが移動するという光景を見たことがある。具体的に何の映像かは覚えていないのだが、それはその地域で行われてきた毎年恒例の祭の映像だった。町は変わり果てた姿になっても、その明かりの移動は毎年安定して行われてきたのだろう、そしてその行事は悲しくて不安定な被災者の心をつなぎ、どれだけ落ち着いたことだろうと思った。

これら三つは、互いにかぶるところもあると思うが、今の時点で自分が被災地の農業再生に関して気を付けるべきと考えるポイントである。

今大学で農学の中の主に化学や生物を学んでいる者として、自分が将来できそうな被災地の農業再生へのかかわり方は、新しい農業に関する研究を通して農学に貢献す

ると同時に、農学を応用して被災地の農業再生に貢献することだろうと思う。そのために、自分の核として専門という一つの武器を持ちたいと改めて思った。